

特 別
A5
6551
3





長江舟

富子

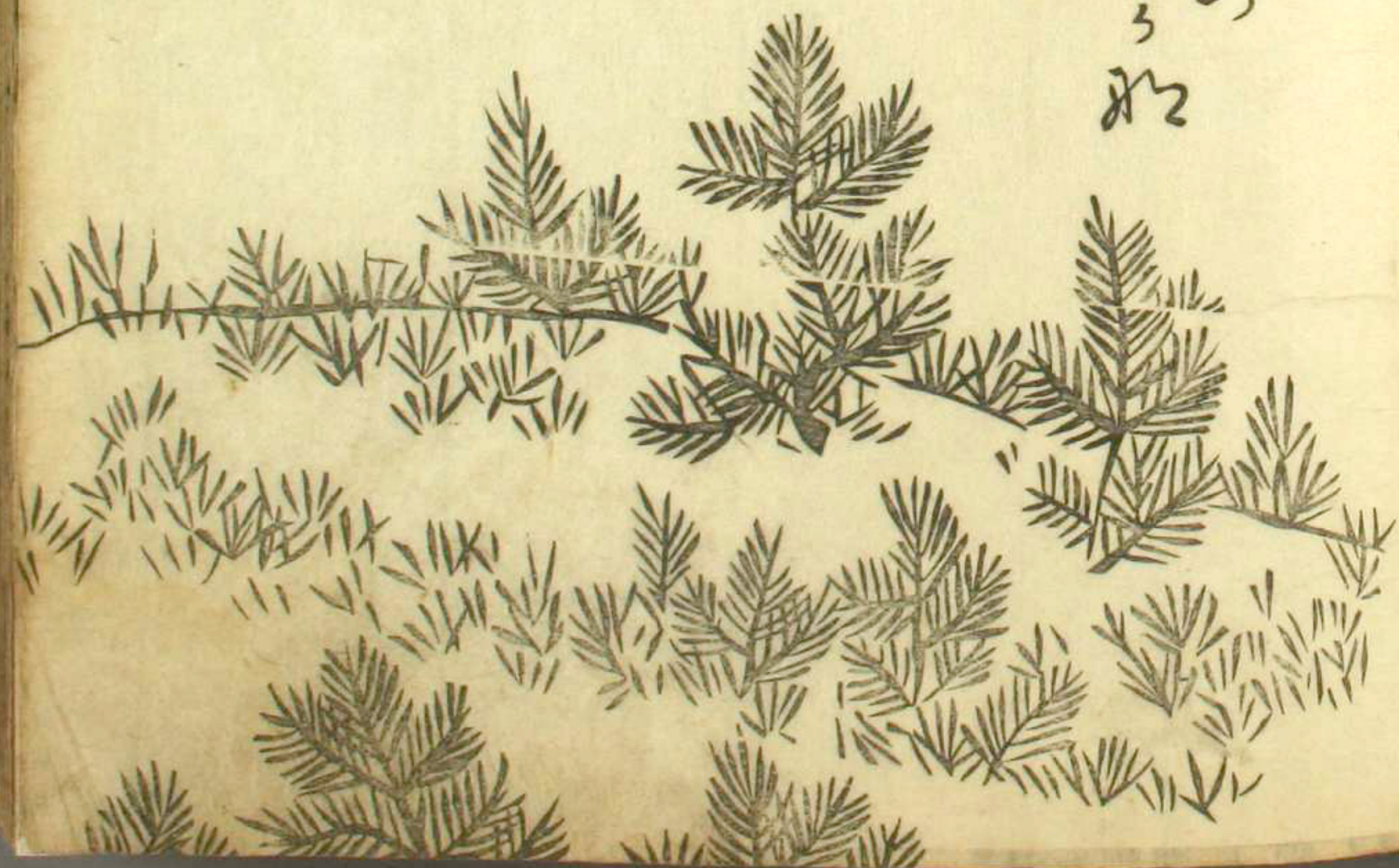
未尾子

渡舟

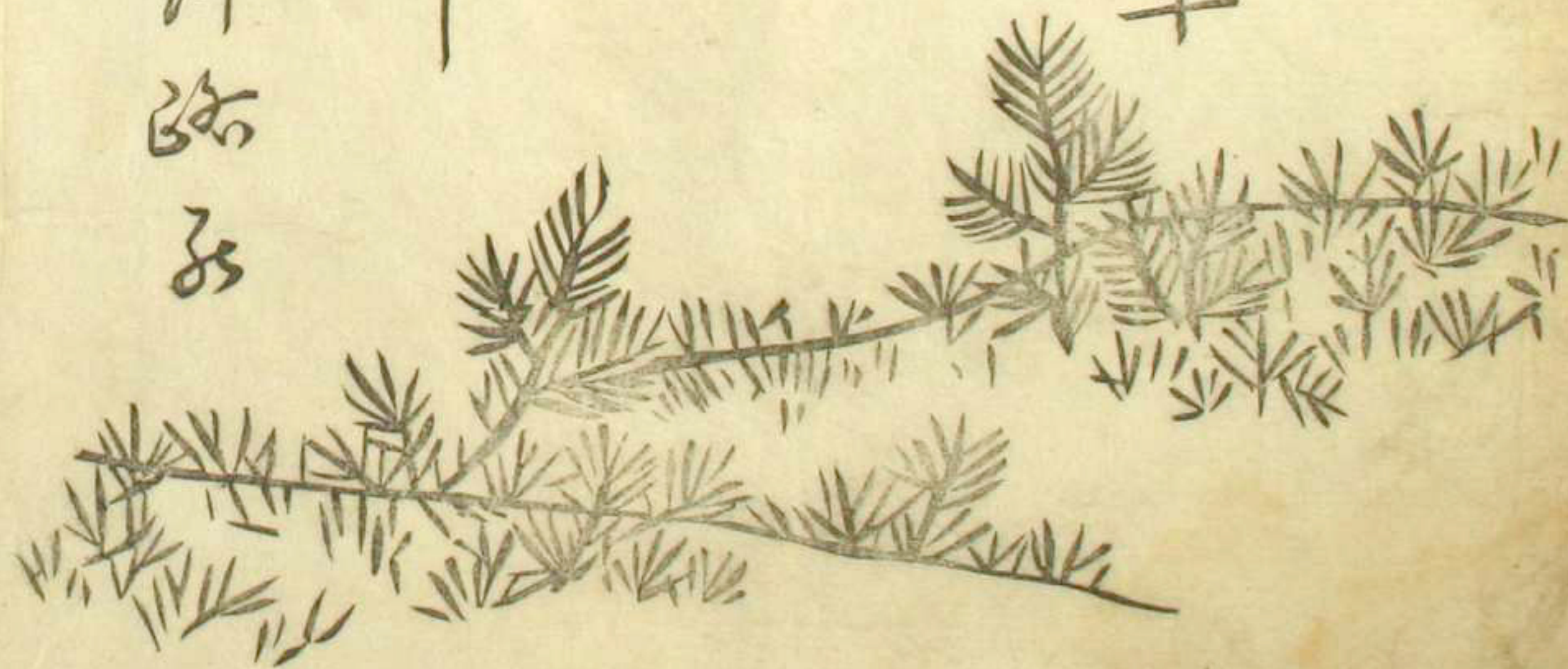
翠之樓

渡舟





何
の
如



野
路
子

藤
之
子

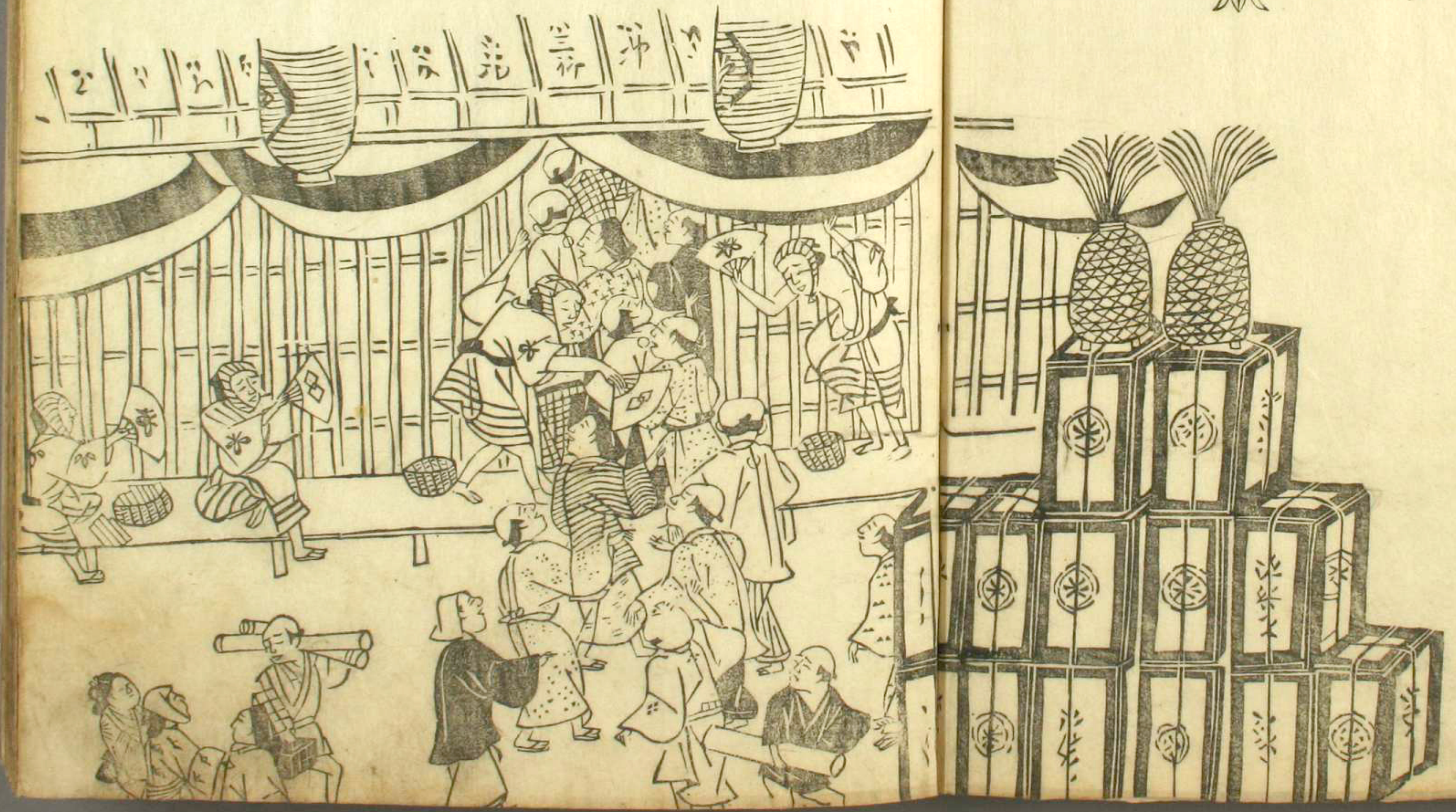
子
若
日
中
先

大
車

周代此可共正月

未仿暫聲感萬人
彩色晚瞳輝四海
同看翠羽角鬘秋

壽林題





層武者乃負子
勝と此諺子

東為

七里の

富ヤ七騎乃

鯨突



初
烈
年

い
ま
は
な
か
ら

花の鞠
法

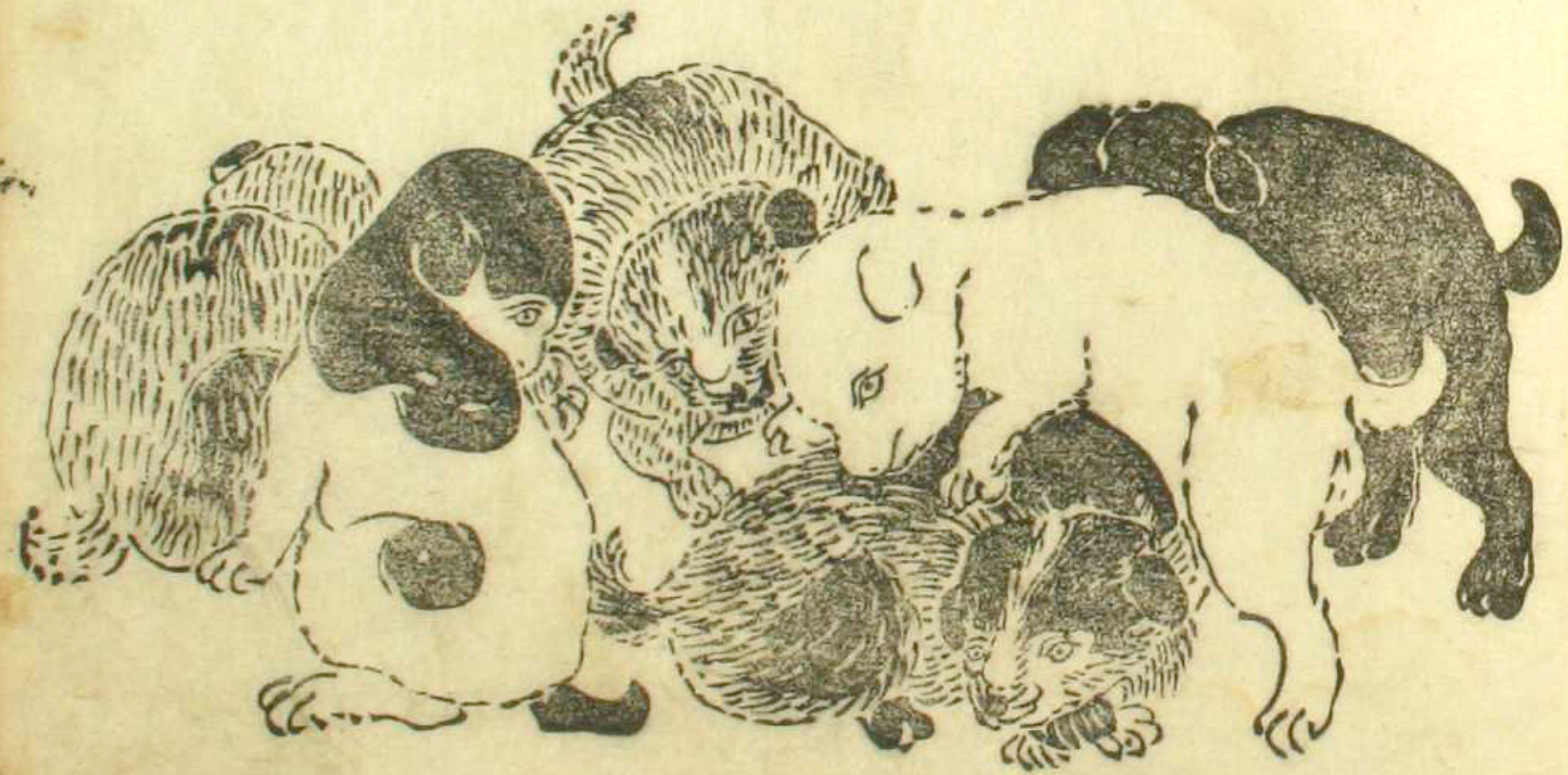
玉
懸





稻書八波乃
 秋於此火可也

催耕



いぬゆへに
運命
習い

五

体極也

日向清し

かきり也

鯉藻



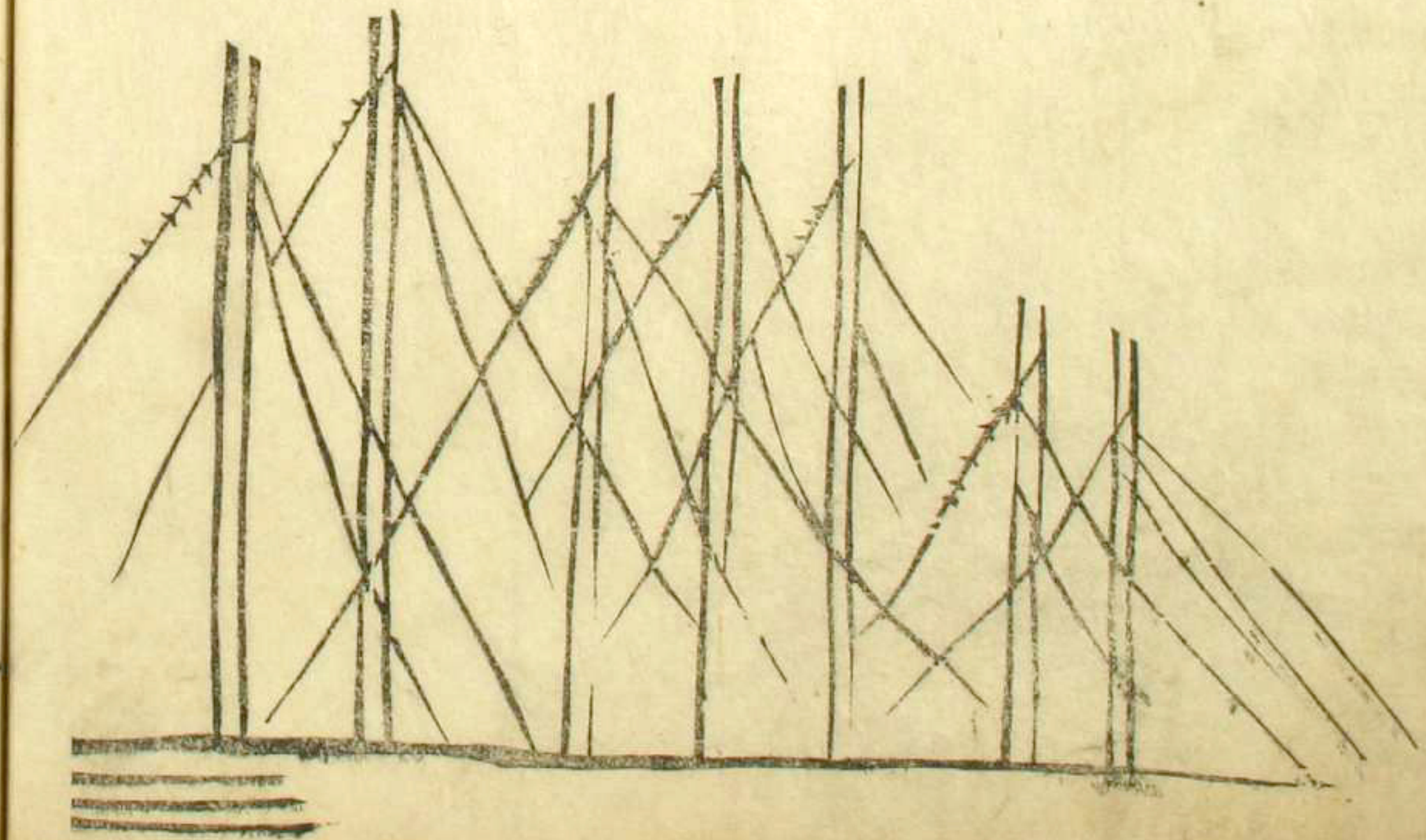
老々年々

河に帆
帆

りふらや

橋の秋

超国



祇園會也

み
—
ふ

深
な
る

加茂の川

東
至





虎の尾と
ぬいすゝ花
おあしたた

鷲十



胎
不
大
津

湖

高
足
。
ノ

志
成



行損也

竹葉茂

日行々

明々々

栖礎



晴
吟

志
之
人

系

杖
也

育

し
ら

呂
郷



市人小

海菜
菜
菜



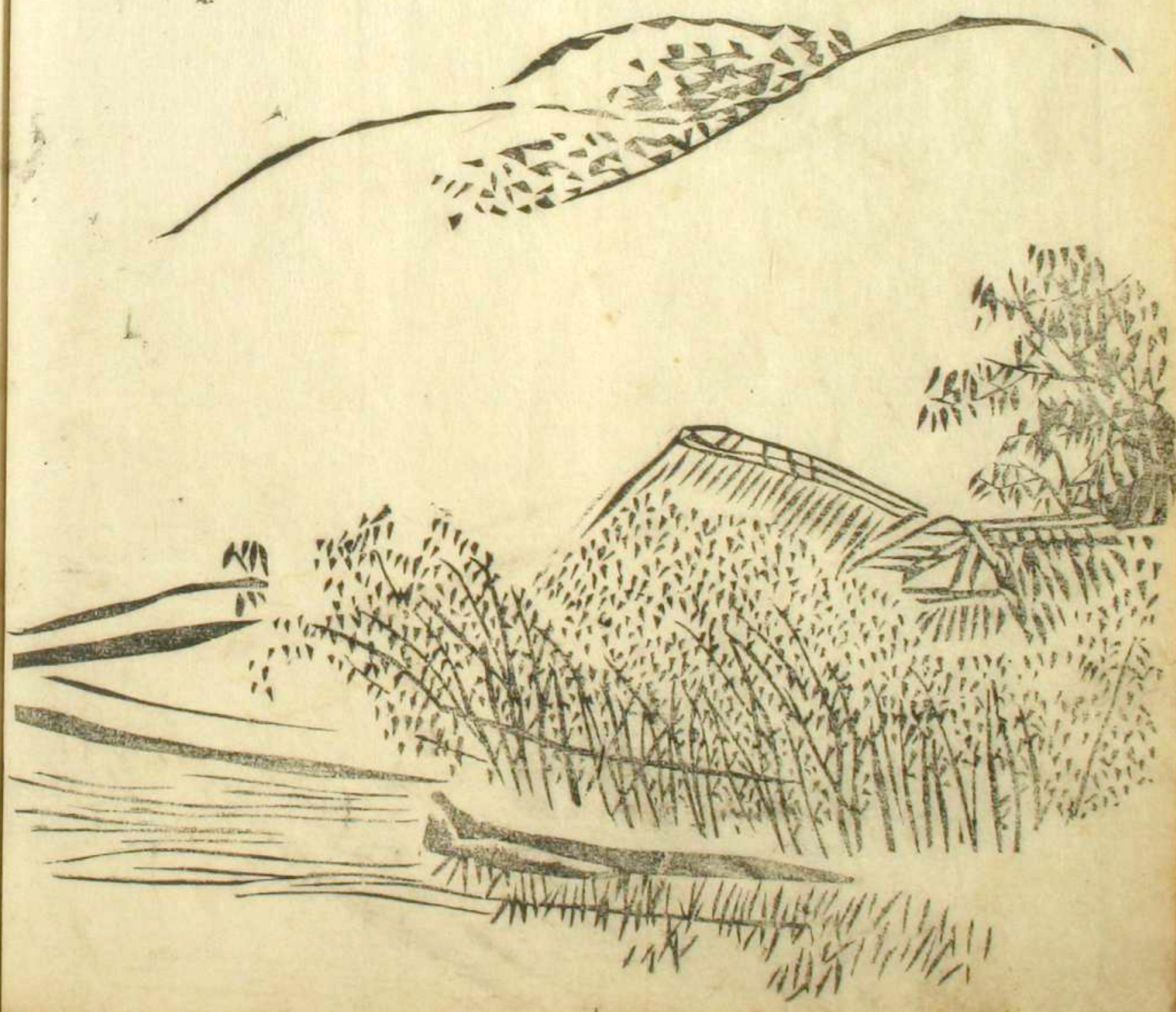
唯多法使

和靖

子
 乙女
 田
 標の
 行
 成



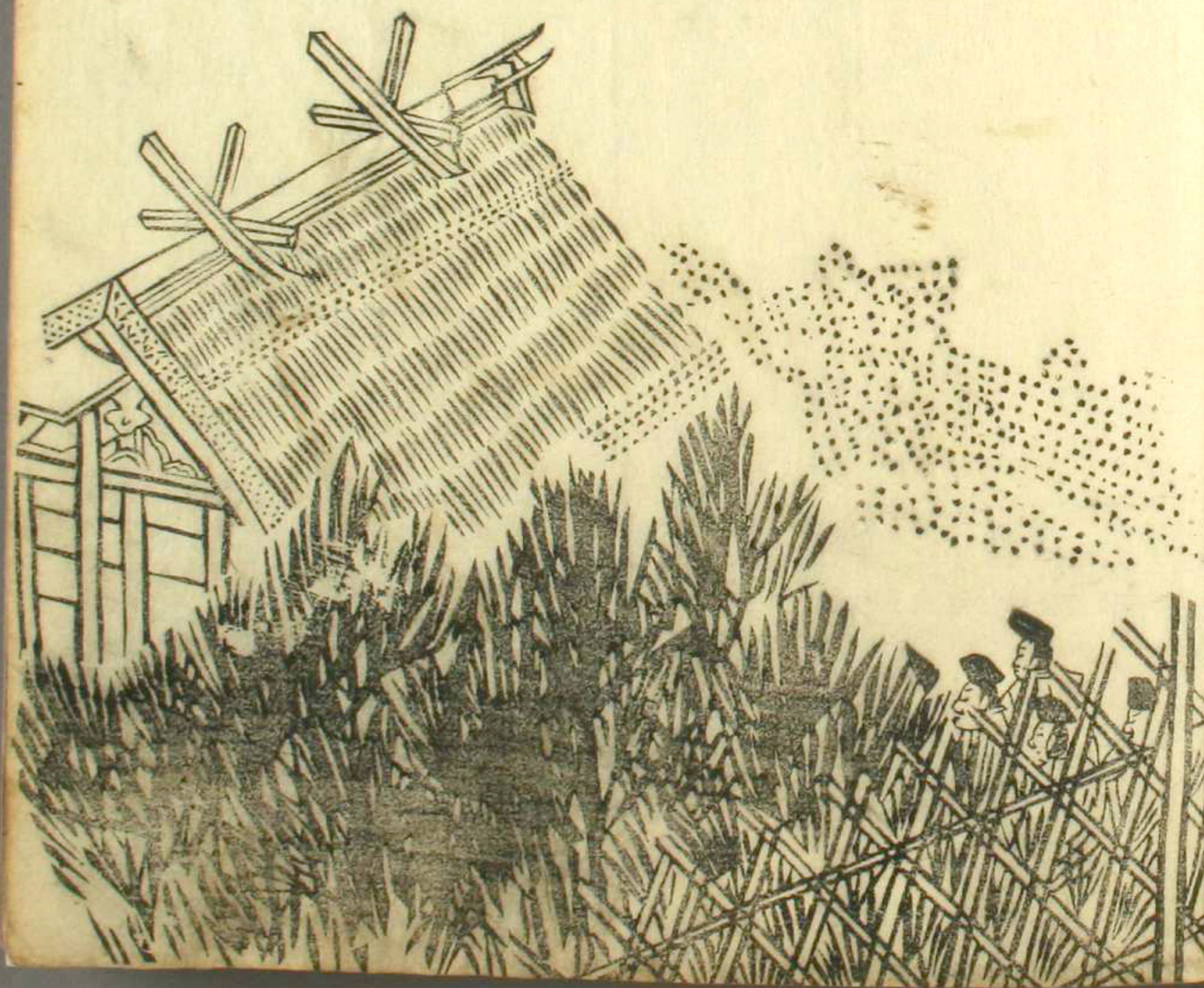
子
 佩
 路
 霍





寄生木也
 希紅の子紙
 扇るは

朱
 改
 潮
 山



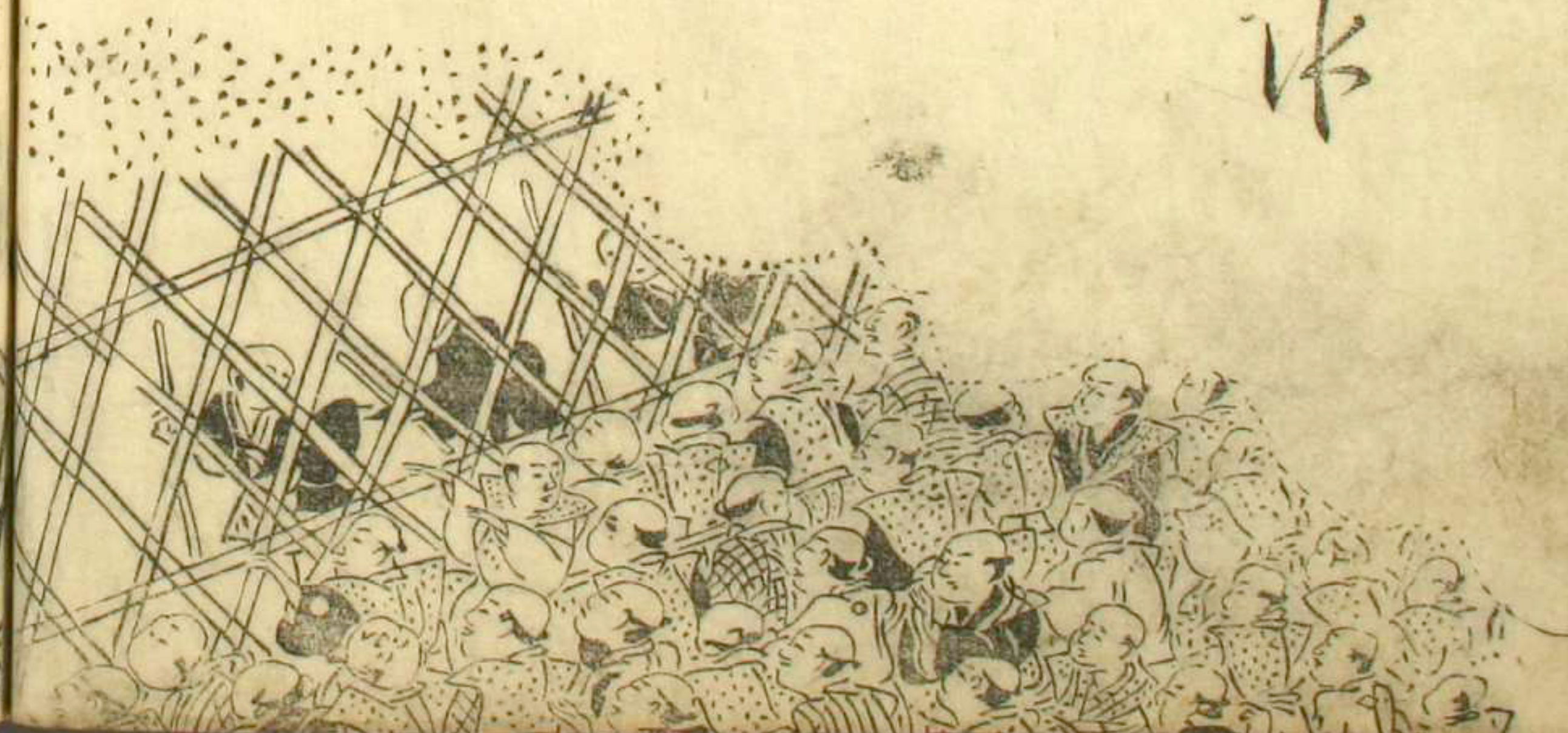
峻時搏風於高天之原互

斗水

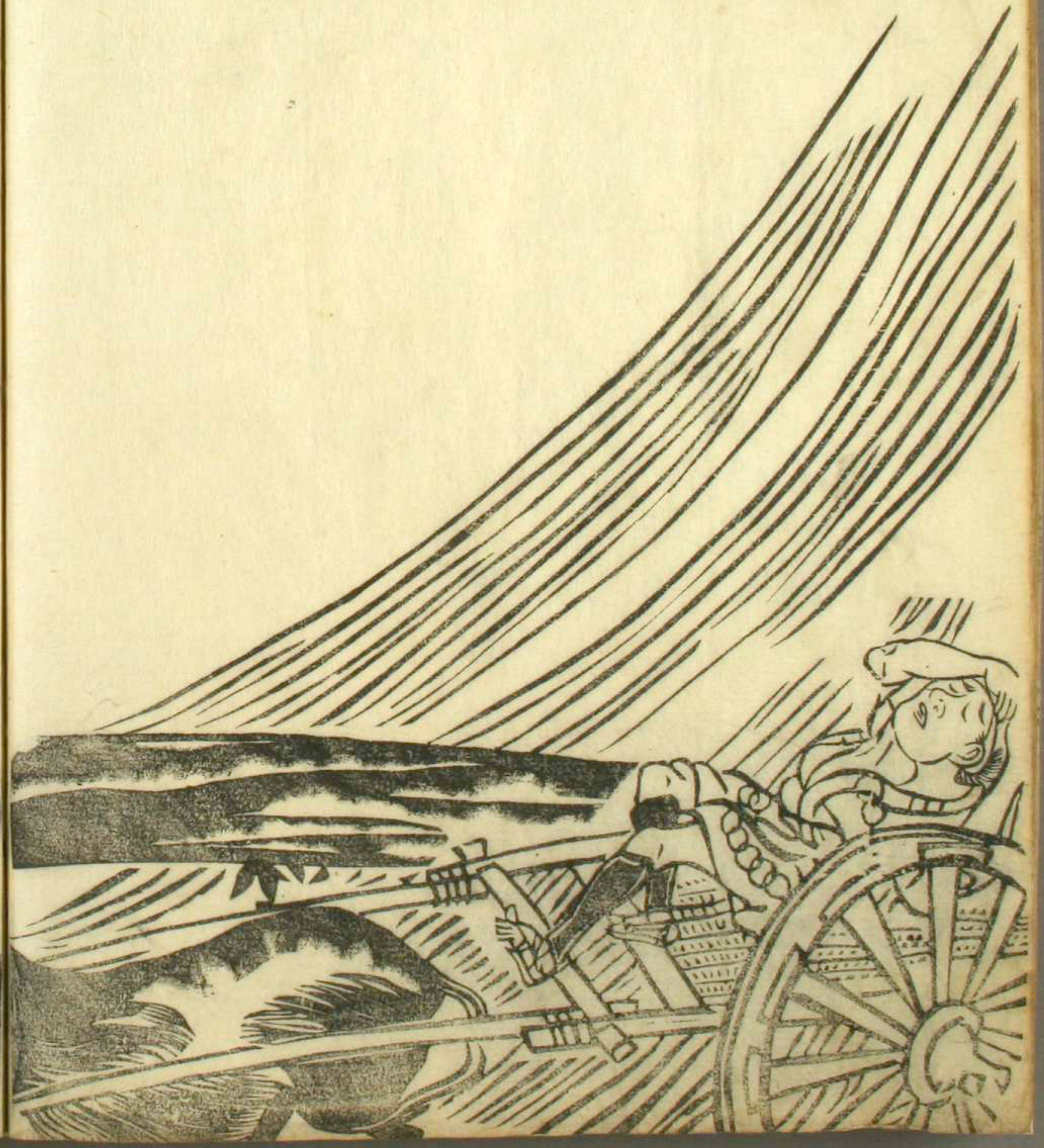
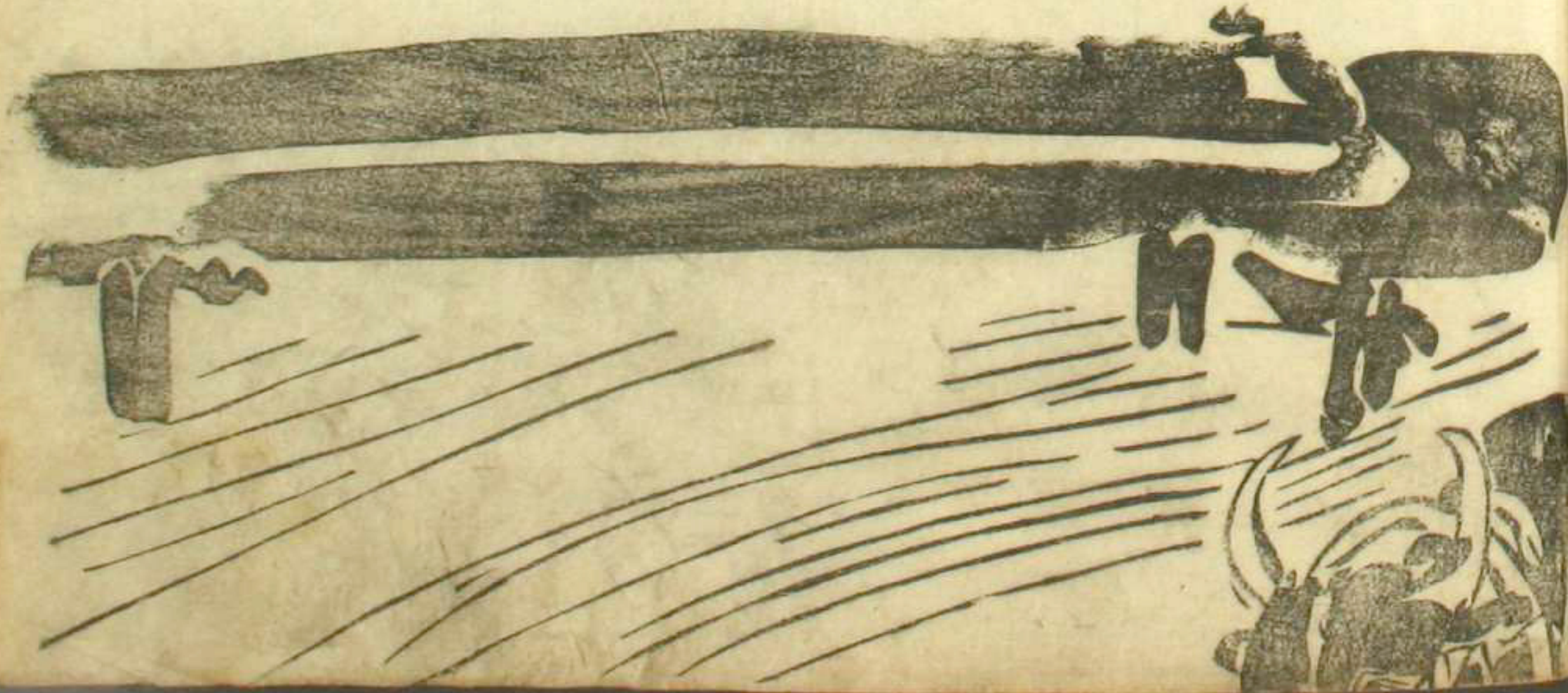
火焔の

御代能轄の

二行ら



青柳や自己の
鞆
面
おろし
襖山





人
八子
角
浅

折
新
、
款
う
半

碩
藁

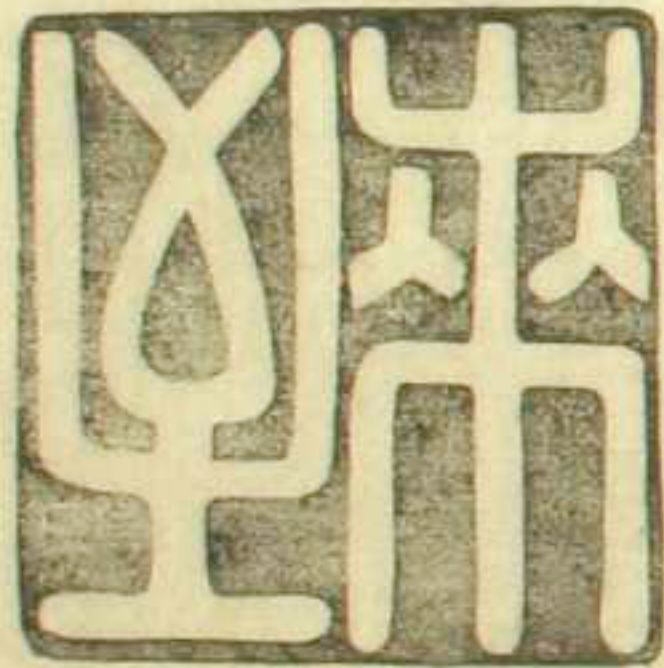


少人聚也

高き橋は

嫁の五三

陶丘



右百畫

春窓翁一蜂書



次名命

すくふ氏の

海御

夷海

於取



春之部

白梅也志海より教の園より枝 扇理

梅咲也腋と枝外新梅の信 裸竜 也総菅忘

其家此之戸枝一雜よりり 連城木花店

うふ子信遠あり心也桃乃花 梅社翠光橋

蓋一飲よりり一お月も来 渡舟

くれ木うくさる花也蛙より那 蘭社

位保娘の羽子板長一利根の幅 龍殿

ふれ雲も人の分あり花乃雲 万里

お葉れいう無顔とく戸くれ 尔来

汲鮎より味深糸を心都一ふ 秋糸

雲ありに老乃好くや心よりり 卜室

一園信香小自ひよりり梅々宿 盧橋

径の子の青の蕨乃染あり那 見指

塔望の山陽よりいよは色く 珠畔

お辰く心乃居よりり乃信を解 禪祥

山清く地は静かうん 伏見 玉城
山吹も花もいふ 露も花の水 花後
そんは といふも 梅も花もいふ 素也
野も山も水も花もいふ 蛙も 松韻
物も花もいふ 嵐も 梅朝 有河
梅も花もいふ 子も花もいふ 翠井
白鳥も花もいふ 田舎も 橋も 尾谷
花もいふ 遠も花もいふ 蛙も 十曉

夕ぐれも花もいふ 利も花もいふ 水徳
まらぬ 花もいふ 書も花もいふ 曲城
梅も花もいふ 是も花もいふ 下東
青柳も花もいふ 曉も花もいふ 瓶帯舎
利も花もいふ 風も花もいふ 柳も 秋香
山も花もいふ 猫も花もいふ 松十
鳥も花もいふ 是も花もいふ 中水
山も花もいふ 婦も花もいふ 中水 壽林

菜のむよ溝と依る田圃のふ 東宮
 里をむく何事かあふ山踏水 東至
 ありとも此何んかそき春葉成 山市
 藤柳や日傘の下に切細と 九阜
 実のまぬ地は照屋ふりよの松 松道
 白魚や己う園か灯を便り 燈十
 入相一敷りと地とあうし付 散士
 春海苔は隈とけや治のと 難友

葉やまけし治ふ 治のと 閑子
 法橋一海に影あうく胡蝶水 栖礎
 切鳳巾のむきとまぬ山踏水 治露
 蝶にのり舞子の演若者まて 和靖
 まる月此價めくし星は葉 灰好
 引露乃治し心し 鶴 鳥角
 陽をたよのふと治し松う雲 六雲
 おのの葉乃法橋よまをせにけり 儲十

此のち勅うそ藤はう初り此
まの目や水字ハ方夕言色
川崎の菖人ハはたやそ是事ハ
長宗とや目小ハ付るハ蟻の足
深さうそ藤はう初り此
磯山
陰馬
治道
來至
碩氣

春の夜に嵐の為寸もらぬか
茶畑と茶葉と居無何と枕の花
存義
買明

夕くらねや雲と志りハ花の箱
常々おのほのつる紫小舟と
若葉やまんならわと花と
まこととと鹿尾とさうら花のむ
灯を消しては義のや妹背能
ほろみ喰う百花の乞合うれ
紀逸
珠來
雞口
露牙
栖霞
春來

侍儂くちまう啼くは郭へ
 有舟也まうやまうす馬の白
 年望の涙してまうは初鯉
 々か又前髪とふふ富士系
 竹の葉はこまをく暑うれ
 砚持く月々啼くは 落墨
 體謝く傘貸は比る道水
 ほろりたる空苔のまは異心

塵匣 十曉 斗水 九皋 志成 博我 良義 諺十
 松十 曲瓊 栖礎 左立 庭貞

素也 秋香

油香子成ん有くまはくは原
 葉のむや例は湯舟は落墨
 鶴をひの舟房を焼た糸か
 晴りや鐘もく六浦のま楓
 船のの粒塵くはまはか丸鳥
 以白乃日向睡くく白牡丹
 化をれ 啼くまうあ月白
 卯の朝まを道りて可くは祭

塵匣 十曉 斗水 九皋 志成 博我 良義 諺十

樹く、これ凡そて鹿乃衣之
 花溪
 立屋と世糸引や小懸釣
 米平
 岩けしのおしを石た骨うぬ
 松鐘
 馬の脊く也く流ちてや初松盤
 俵砂
 山水よあま流のや中々好
 左好
 高き也や志く流く波し松
 玉娥
 色く火熱流のそ白く言高蒲草
 野菰
 あくう尾をらるや朝の音あや
 冬至

水空舟の信く我見くや厚少
 壽林
 物きひ乃灯も消もせくお月返
 松返
 山くも又帯をくして見く異心
 閑子
 飛石の火た高ちりて流の好きか
 海彦
 病の所く風をそくぬぬ園扇
 東為
 馬の尾小蛇乃打向く暑くぬれ
 珠多
 祇園會や乳母くさ流く百福壽
 福里
 薰風や流磨くぬ石の神多燈
 燈奈

お月雨をほそ夜抱く門の白
砂的
之夜之秋踏統く世活や郭云
細山
岸や二節にすしら魚乃道
碩嵐
蟠の果はうひて露る月夜
来至

白魚や氣吹くくぬれ流つと
平砂
醉酔く人をよの母を教ぬふ
樓川
わらわやうきうきとつと雲の露
再賀

うらぬ女の姿あけし帷もや
秀億
貝ふかしも美たはてさわかほり
柳尾
蟬の腹へんんきく秋の虫後川
田社
降ととと詠とと詠ととけとと
永機
百合咲や傾くくく一帯
栖霞

本小舟はうらぬをふりたる
春來
蟬掛ぬ影とさうり月涼し
爽之和

秋之部

菊の影よ梅と遠く月と雲	八重や木毎さく女乃おらさあ	朝の霞や戸の明無角扇り竹	たまのこゝろ雲やさる雉の風	名月や波磨の帆あつらぬの帆	酒吹く仙のまのねまはる月	園守にあうら拂ふ袴か
菊社	渡舟	梅社	立紙	龍眠	扇理	連城

朝の霞や夕の雨と持あそく	葉とささねくも末は月見水	舟あはれ流もさぬりや若る麦の毛	徒の秋を秋は人よ心秋はうれ	君うたやうらもさ記背戸ふ日の照	我も又誰踏さうん魂さうり	ひらきもた又流うくと秋の空	何事やうらんと早の秋を秋
珠畔	盧櫓	見指	秋京	万里	淫祥	卜室	百義

稲穂くもさきも宿稻の花さうを 十晚
 日の脚も人よ佳き無風や秋 花溪
 菊落もは菴の影さきも秋香 秋香
 夕めせし物敷いそぬ菊乃花 九華
 めくろくく之園の月田毎うれ 栖礎
 心辨も朝と白子れ橋の南 松十
 秋の枝よ同一さきも宿稻 尔来
 名月也稀な枝垣の渡一守 秀園

川むこ馬の通く如野乃綿 釋後
 舟多成残して宿稻の影さき 閑子
 水満く金ふさぎや十ら夜 祇心
 稲妻や石碑の文字たつ宛 东至
 柳ふくして時鳥の家れ柱立 越中
 胡夕き少袖さきよの稻の毛 呂白
 點造く花さきも宿稻の影 山市
 晴葉や鳥糸はさきも宿稻 东為

るに節の葉打するや男良む 松邊
 流點や磯名のなれ芳世川 祖平
 大英今流花を荒川 旅の笛馬 叢士
 故の葉爾れを林と月夜氣 柳山
 道灌の神よあはれと一藤の心 壽林
 糸くの樹と葉なら一葉紅 活齋
 濁るは酒よ世あはれふの月 尤好
 人よとても頃無年を詠れ 斗水

何のそれ物もなかりあはれ色 活齋
 さ海く不図兩流は濁り那 玉娥
 穂よ出ぬものかこせと軒の花 寔雷
 朝むけけ流青に深し廉世夢 了東
 絶言おら子の泣くおや小歌詠 子屋
 一先とて幼嫩く席を野もふら 旭光
 初をわとれ意気まする月夜氣 徳源丸
 名月や月よふ山星れらうらら 曲磯

名月や庭うらも 之を山 素也
竹まきと鶴を山せりり 星は宿 諸東
み月や庭うらも 只心と夜 仙桂
白菊やみおと 且無酒冷ひ 碩嵐
為月や人の涙乃 恥し 記 来至

初秋や月うら 風の出せり也 米仲
爽あつてす 雨と一人の菊菊ぬ 湖十

我桂と我うら 秋葉れ 吉門
かゝ庭や蓋ふと 秋の露 清泉
百ふたりの所持と 素山ふか 庭臺
月影し ちのれをさ 菊備れ 圖大
相の心や佛よ 心を記さう 道院
鶴やたのまう 腸を橋さうら 栖霞

冬之部

初雪や道うら 心と 龍眠

秋の雲又吹去きて河ぬれ 扇理
胸よりのはも今朝は晴ぬか 虫籠
木枯し籠入るあふりうら 連城
多岐そくく喜の静ふ言は 渡舟
け中にうねくもや室の梅 蘭社
鶯籠や腹く汲も琵琶乃湖 梅社
名の方野花の仲も無尾流と 程祥
おひくくも神宮かす通うた 見指

村ぬれもく成小まこの那 尔来
反古流乃昔れもあや 糸巻 素也
室の梅人へ利はふ成よりり 曲歌
うら宛うもよ森の鳥は宿のれ 盧橘
わもん也をせめてぬのは年忘 珠畔
下戸一人あよ森く居る言は 万里
窓へまそそ訪く走は霰のれ 鹿成
月も鼻も出る葉の路巾は 閑子

時もくもやまをたぐの鐘の敷 十曉
 海よりと海を力に海氣の如 壽林
 世の中哉らんを又まゝるる屯 東至
 少くもやうう海を侍通て神送 海十
 賤う家雨とうたふ海葉の如 松送
 雪の戸やまゝくくくく風可 柳山
 波のと雪の流るく小船の如 碩氣
 鴨のるを海とくくくく 鴨鷲 東至

信のくくくくくくくく 祇丞
 川向ひ少くもくくくく 旨原
 海よりと龍の鐘のくくくく 萬立
 やくく市れをくくくく 嘉延
 神園のゆきやくかん葉冷ひ 由林
 かくく乃雲をくくくく 海如
 かくく是袋のくくくく 鳥狗

生死の今ふらぬ海氣うれ 春堂
河海もや清も能く河海も 栖霞

句この清藤藤心の河海も

散たりと心河海も此吟を

室〜〜〜

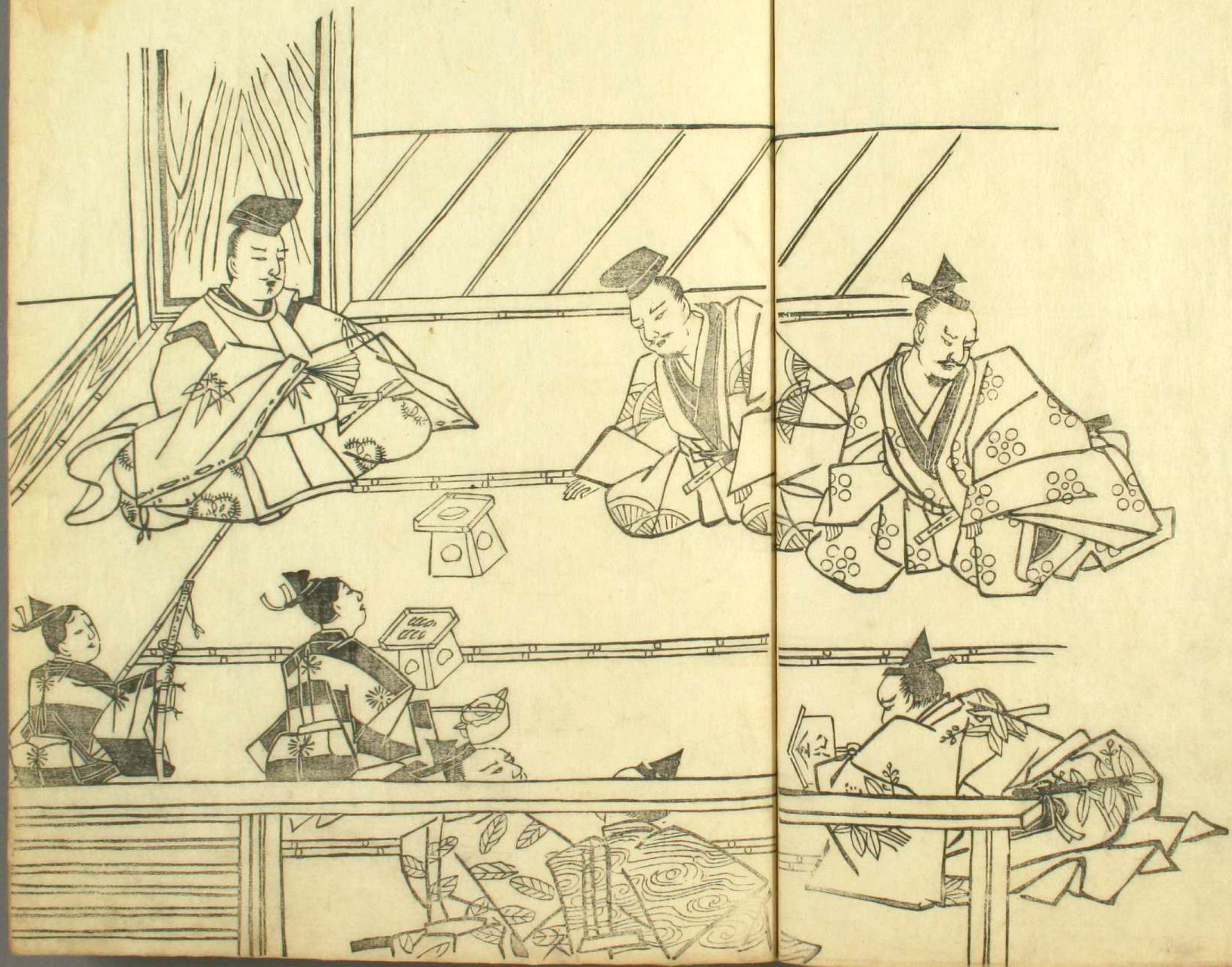
〜〜〜

花とられ一を藤藤心 栖鶴

春の河海も清も能く河海も

映於や月を清も能く河海も

あ〜〜樹の清も能く河海も



いし海探函大いしのりしと
名函しし海ししりる又古信椽
音曲の記ししし花やうま
又他し戯ししあししし
しるし綴ししし平あししし
是や六しあししし古信椽
あししししししししし
ししと函綴の終り
しすのし

曲水の歌やはらりて六秋仙 栖鶴

糸乃札しし芽をむすし

るし即は終しと曉しあしし

後ししししししし

井戸掘しと終しと目しとあしし

雲のししししししし

伯母ししししししし

えは浦乃鞠しし破風を流しし

婚礼を引ッさひり 雪標
丹波白くく二人 欠落
先物と角細とわとるんり
多々茶粉六斤 饑前に来る
本知小塊中 藤然ちまひはく
外喜さく 斗海大雲
虹の月ち一海よ見ゆの境乃水
首良ととくくと善之人

瓢葉にあらととく 酒 乾葉
け若細くく水よ一合
山河又少神造と保保娘
人くさひとと胡鼻るはし
寛一石炭多ん多中月心
鶉を横一川 裂冷りん
婿う髪唇ひ先ふさもはり
色落赤くはあはれと股

目附役ありと白服立ふり
山寺登りて児の世を
廻のふ手足と蟹と蛸
風醒く詠尻河
少る月心ゆきて怪あす
冠一ツ一合と塩素
金貸し奥ふ貫抜キ十文字
心手傳付く八幡伝言

首飾りく虚をふりて巾
虎態ふ走 意流る猫
いせくとも女房達乃也
鳥のつら鳥のつら鳥のつら

力一帖以畫園是平儀友
莫の之舟上之六鞭とあり
物と道より比と物榮輝法
産ありて莫く氷上深淵に
交り厚くやもの水とあり
何一もの今一画と勸
是尔好士流秀所法を法と

二毫もは意味と相照し
影とすも是大澤先生を
席尔あり如翻に画とあり
画木画とあり一とあり
ありけ天と如去の筆此
廣くかゝるを觀むる也



巢居栖斲
身窻一轄
画
砥仙碩
瓠
敦
且
來
至
訂

寶曆己卯歲五月

書肆

柳枝軒

